

小林 不浪人（こばやし・ふろうにん）

1、プロフィール

川柳作家。剣花坊の「大正川柳」で認められ、黒石に結社を創立、川柳誌「みちのく」を刊行。同誌の「ちび筆」の舌鋒は〈東北の荒夷（あらえびす）〉の異名をとった。本県柳壇の先駆者。

<生没>

1892(明治 25)年2月 23 日 ～ 1954(昭和 29)年1月 19 日

<代表作>

『みちのく』

<青森との関わり>

黒石町(現黒石市)生まれ。東奥日報社、青森市役所、黒石町農業協同組合などに勤める。

2、作家解説

明治 25 年黒石町甲徳兵衛町に、野呂末太郎の次男として誕生。本名長三郎。40 年小学校を終え、東奥義塾に入学。43 年頃から川柳を始める(号蝶三郎)。20 歳、母の実家(南津軽郡光田寺村)の養子となり小林姓。大正2年黒石の川柳会浮雲会に入る。

3年黒石尋常小学校の代用教員となる。東奥日報川柳欄、井上剣花坊の「大正川柳」に投句、頭角を現わす。7年川上三太郎の勧めで、野呂冬山、山田よし丸らと黒石に川柳みちのく吟社を結成、川柳誌「みちのく」を創刊した。

10 年東奥日報社に入り、同紙夕刊に川柳壇を設ける。またみちのく吟社青森支部を設ける。この頃「みちのく」の評欄「ちび筆」で全国に知られる。

県下川柳大会(9年)、海峡親善川柳大会(4年から青森、函館で毎年交互に開催)を始める。

15年青森市役所に入る。姓を旧姓の野呂に復す。19年6月戦時下用紙の統制により「みちのく」が終刊(288号)。20年青森空襲により被災、生家に帰る。青森市役所を退職。12月「新生みちのく」を発行。23年県内吟社の合同により川柳誌「ねぶた」(代表後藤蝶五郎)が創刊されると同時に、復刊した「みちのく」は通算300号をもって廃刊となった。この年雑誌「月刊読物」を創刊、「知事と太宰治」、太宰の絶筆「黒石の人たち」を掲載。29年1月19日脳溢血により死去。享年60歳。

37年句碑建立委員会が中野神社境内に句碑を建てた。

あきらめて歩けば月も歩き出し 不浪人

38年同委員会により川柳句集『みちのく』が刊行された。

3、資料紹介

○『みちのく』

図書

1963(昭和38)年8月25日

180mm×125mm

川柳句集。著者の没後9年を経て、小林不浪人句碑建立委員会によって刊行されたもの。大正期より晩年に至る231句を収める。他に「ちび筆」の文章4篇を収録している。序を川上三太郎、竹内俊吉等が記す。